



石山達也博士（富山大） 分子シミュレーション学術賞を受賞される

森田 明弘（東北大院理・A01 計画研究代表者）

本領域 A01 班の研究分担者である石山達也博士（富山大学）が分子シミュレーション学術賞を受賞されました。この賞は、分子シミュレーション研究会より当該分野で顕著な業績をあげた 40 歳以下の研究者に与えられるもので、この分野の将来を嘱望される人がこれまで受賞してきました。このたび石山さんの「液体表面の分子シミュレーション手法の開発と応用」の業績が認められ、分野のホープとして高く評価されていることを示しています。彼にとって一昨年の分子科学会奨励賞（本ニュースレター14号）に続く快挙でもあり、心からお祝い申し上げたいと思います。その際のニュースレターでも長年の共同研究者としてお祝いの言葉を書かせていただきましたので、なるべく重ならないよう多少個人的なことも書かせていただきたく思います。

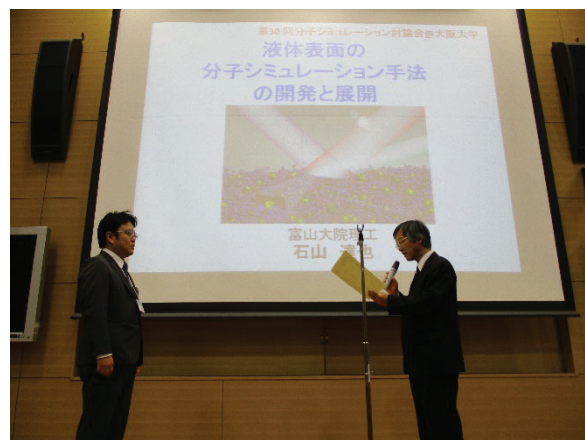
石山さんが私の分子研の研究室に博士研究員として加わったのは、2005年のことでした。北海道大学機械工学の博士号を短縮で取得したばかりで、初々しい意欲あふれる若者だったことを思い出します。まず分極モデルの勉強や、当時開発中の和周波分光の計算プログラムを使うことから始めましたが、本当に熱心でめきめきと短期間で上達していきました。当時から特徴的だったことは、研究にあたって自分を納得させるレベルが非常に高いことで、これは一流の研究者には共通のことですが、なかなか教えられることではないと思いました。石山さんは私の原始的な和周波分光のプログラムを大きく拡張するとともに（ちなみに、我々が使っている和周波計算プログラムの名前 Calnos は、石山さんの命名です）、それを使って水、電解質水溶液に始まり、数多くの成果をあげて和周波分光の理論計算の威力を示してきました。

理論の方法論を出す仕事のほとんどは、方法のための方法のようで実を結ばずに終わる例が多く、私も学生の頃からそれではいけないと強く思っていました。和周波分光の理論はそれらとは一線を画して、本当に役に立つ有効な方法論に成長したと思います。その有効性を世界的に確立したのは彼の功績で、今回の受賞でも評価の対象となりました。

石山さんの仕事ぶりを見る人は、productivity の高

さが印象的だと思います。多少の困難があっても確実にデータを出せるという信頼感は、石山さんと仕事をした実験の方たちの間でもすでに定評のあるところだと思います。SFGの理論計算も分子モデルも正しい第一原理の基礎に則っているはずなので、正しい計算条件やモデルを選べば正しい結果が出るはずで、しかし、実際にやってみるとその信念とは裏腹に、多くの不確定な条件のなかに埋もれて、正解に行きつくことは決して容易なことではありません。こういう場面は研究のなかでは多くあることと思います。そういう場面での石山さんの実力は抜きん出ている、多くの幅広い条件を陰に陽に検討して最適化していき、正解にたどり着いていくという場面を私も数多く見てきました。研究に没頭する集中力の賜物であり、共同研究者としては頼もしい限りです。

石山さんは、分子研の博士研究員の後で東北大学理学研究科の助教を務めた後、数年前に富山大学工学研究部に講師として転出して准教授に昇進されました。富山大で独立研究者となり、研究室を一から立ち上げて運営する経験も積んでいます。学生の指導でも頑張っていて、新たに指導した大学院生の研究発表が学会で優秀ポスター賞も獲得しました（ニュースレター39号）。今回の受賞対象となった分子シミュレーションの分野はもちろんのこと、物理化学や古巣の機械工学の分野まで、今後広く主導的な役割を果たしていけることを期待されています。



第 30 回分子シミュレーション討論会（大阪）の授賞式にて。石山さん（左）と岡崎進会長（右）。